

# 意欲なき学生群を前提とする

## ひとつの教育理念

川口 顯 弘

### はじめに

小論は文部科学省の科学研究費による共同研究「マルチメディア利用による仏検準備のためのシステム構築と教授法の研究」の一環をなすものである。簡単に言えば「OPUSに基づくフランス語教材の研究」ということになる。「OPUS」とはコンピュータを用いた教材作成ソフトの商品名であるが、その卓越した教材自動生成システムに着眼した千葉工業大学・大久保政憲、北海道大学・長野督、および千葉商科大学・川口の3人は、同ソフトを駆使するフランス語教材の共同研究を企画、幸いにも科学研究費を得てその開発に着手することになった。これは3人が協力して同一教材の制作研究に当たろうとするものではなく、それぞれ独自にOPUSシステムの可能性を探るものだが、私の担当はNOKドリル（仮称）の制作である。しかし遺憾ながら肝心の制作作業は現在まだ予定の半ばを達成したに過ぎず、その完成にはなお相当の日数を要すると考えられる。そのため小論では、いわば中間報告の形で、上記教材制作の基礎となる私の教育理念および語学教育論と、その具体的な反映としての未完の教材を例示することにした。ただし本稿では、まずその前者たる語学教育論のみを扱い、後者については次稿で扱うことにする。

### 1. 二つの英語教材における奇想天外な宣伝文句

ひところ、ある英語教材の広告に「英語は死ぬほどきらいだった。だから英語が得意になった」といった趣旨の殺し文句が大々的に謳われたことがある。このとっ

びな、意表をつく宣伝文句は、(現に私を少なからず驚かせたように) よほど効果的だったようである。この広告は確か十年近く続けられたように思うが、近年まったく見かけなくなったのはいかなる理由によるのだろうか。もっとも、消えたのは人目を驚かす文言だけで、同じ語学教材「スピードラーニング」自体はいまなお盛んに宣伝販売されているから、あるいは「英語は死ぬほどきらいだった。だから云々」という殺し文句だけが、やや誇大な広告として自粛されたのかも知れない。

これと似た宣伝効果をもつ他の教材として、最近私の注目を惹いたものに『英語は絶対勉強するな!』という本がある<sup>(1)</sup>。上記「スピードラーニング」は通信教育用教材で价格的にも抵抗があるが、こちらは1300円という廉価な本なので試みに購入してみた。すると案の定、“絶対勉強するな!”というの「従来型の勉強は絶対するな!」と言っているだけのことで、その骨子は徹底したリスニング訓練と、それに続く徹底した書き取り訓練、さらにはそれが仕上がったら今度は英々辞書を用いての、同じくこれも徹底的な構文理解を要求するところにある。中でも私をほとほと感嘆させたのは、著者が勧める学習法を実行するには、根気と忍耐こそが必要であると、とくに強調されていることだった。これでは「絶対勉強するな」どころか、「正しい学習方法を用いて」という条件付だが、いかなる教材にも増して必死に勉強せよ、刻苦精励せよと言っているに等しい。これなら多少の独自性は認められるにせよ、むしろ極めてオーソドックスな学習法と言えらるだろう。したがってその効果もまた、学習者の不撓不屈の努力にふさわしい輝かしいものとなるのは当然のことである。

しかしもう一つの教材「スピードラーニング」が謳っているのは、どうもこれとは事実正反対の方法であるように見える。他の教材では、たとえば「ヒヤリング・マラソン」と言った教材のタイトル自体からも窺えるように、ふつうは音声教材を意欲的・集中的に聞くとところにポイントが置かれているが、この「スピードラーニング」では逆に、もっぱら家事や運転その他、なにか雑用をしながら漫然と聞き流

(1) 鄭讃容『英語は絶対勉強するな!』金淳鎬訳、サンマーク出版、02年9月刊。この本は韓国語からの翻訳だが、訳本の初版は2001年1月、以後、現在まで約3年の間に公称90万部という驚異的な大ベストセラーとなっている。さらに書店には、著者の説く学習法の応用版として同じシリーズの本が数冊も並び、すべて何十万部という部数を誇っている。

せばよい、という点を強調している。そうやってただ聞き流してさえいれば、いつのまにか驚くほどの英語力が身につくというのである。だからこそまた“英語は死ぬほど嫌いでもかまわない、勉強はいっさい必要ない”という殺し文句が生きてくるのだ<sup>(2)</sup>。

以上は「スピードラーニング」の宣伝文句から受けた個人的な印象にすぎないが、じつは私が強調したいのは、まさにこのような印象——潜在的な英語学習者一般が、おそらくこの広告から受けるであろう印象——と、その果たす役割についてである。すなわち、ある程度の語学力習得を望みながら、そのために必要な努力を回避したがっている潜在的学習者への学習喚起力。

当然のことながら私の関心は「スピードラーニング」の実態にあるわけではない。もしこの教材に効果があるとすれば（それは間違いなく事実だろう）、その理由は「1日5分（聞き流すだけ）！」<sup>(3)</sup>といった殺し文句に反して、実際にはこれまた他の教材と同様、絶えざる勉強、絶えざるリスニング反復を必要とするものであることが自明だからである。殺し文句と実情が相反する点では上述の『英語は絶対勉強するな！』と似たようなものだが、しかしまたそうでなければ語学力が身につくはずもない。だから問題なのは実態ではなく、あくまでもその学習喚起力だけなのだ。語学習得に不可欠な努力を回避しつつ、それでいて多少の語学力は身につけたいという虫のいい学習法の夢、あたかもその痴夢を実現するかのごとき夢のような殺し文句。そんなことが可能なわけのないことは、およそ誰ひとり知らぬ者はないにもかかわらず。

## 2. 学習意欲をもたぬ学生大軍団の出現——語学教育の実態

小論がこのような一見愚にもつかぬ問題をまず取り上げる理由は、われわれがい

- 
- (2) 04年2月23日付朝日新聞に掲載された広告の見出し文によると、「英語は死ぬほどきらいだった云々」類似の文言はまったく見当たらず、代わりに「英会話は一日10分で」「短時間リスニングが英語の才能、引き出す」「努力する勉強に終止符」といった見出しが目についた。とはいえ、この教材を使えばなんの努力も必要とせず、ごく容易に相当の英語力が身につくと謳っている点、先の殺し文句と同様の効果を狙っていることは間違いない。
- (3) 前掲新聞広告では、「一日10分」あるいは「通勤時間の20分×2（つまり40分）」のリスニングとなっているが、インターネットでは、「1日5分！」「聞き流すだけの英語教材！」であることが強調されている。

ま、従来の教育経験だけでは到底歯が立ちそうもない新たな学生群を相手にしているからである。

語学、いや語学のみならず、およそ大学で教えそうなあらゆる学問・課業についての徹底した意欲motivationの欠如と集中力のなさ、歴史的・社会的現実への驚くべき無関心・無知識。こうした教養レベルの低さは、これが本当に大学生なのかと歎ぜざるを得ない現状だが、なかでも誰もが指摘するのは日本語水準のいちじるしい低下である。まともな字が書けない。まともな文章にならない。読書はマンガ本の域を越えない。文章読解力のなさときては、おそらくマンガに出てくる以上の長いセンテンスを読んだ経験がないからだ、という仮説でしか説明がつかない。勿論こうした学生はむかしからいらないではなかったが、それにしてもその比率が問題である。この種の学生も少数であるうちは対応可能だが、それが圧倒的多数となつては手の施しようがない。いまやわれわれは日々、こうした学生に多少とも教養の名に値する知識を与えることが可能なのかと疑いつつ、ほとんど悪あがきにもひとしい「教育」を演じているのだ。

言うまでもないことだが、ここで私が述べている状況は、けっして本学だけの特殊事情ではない。また語学だけの問題でもない。それどころか大学全体からみれば、われわれ語学教師にはまだしも救いがある。個々の学生と直接向き合うわれわれは、少なくとも教室内にある限り、たとえ外見上のことに過ぎなくともつねに学生と親しく触れ合っているし、したがってクラス全体をコントロールすることも容易であるからだ。語学クラスは最大でも数十人規模であり、本学フランス語の場合は1クラス20人前後ということも珍しくはない。他の教科では頻繁に耳にする授業中のEメール、漫画・週刊誌の回し読み、絶えざる私語といったものは、われわれの授業ではほとんどありえないだろう。語学においては教師が授業に熱意を有している限り、学生もそれなりの熱心さで（少なくともわれわれにはそう思わせるように）応えてくれるのがふつうのことである。

それほど授業しやすい環境であるにも拘らず、その語学ですら往年のごとき授業は、もはや夢のまた夢となってしまった。以前は本学でも、1年では初級文法とごく平易な読みものを与え、2年では曲がりなりにも中級レベルの小説や評論（現在から見ると中級どころか上級を乗り越えて、はるか遙か上の高レベル）を読むのが

ふつうのことだった<sup>(4)</sup>。それが今では2年の学期末に至っても、得られる学力は往年の1年前期末にも及ばぬほどの惨状。他方、本学に限っての特殊例とはいえ語学の環境自体は往年の週2コマから週4コマへ、第一・第二外国語必修から1ヶ国語専修へと飛躍的に向上しているのだから、この現象は何かの間違いではないのか、それこそ悪い夢でも見ているのではないかと自分の頬をつねりたくなる。仮にいま、むかしと同じ授業を実施したらどうなるだろう。その結果は想像に難くない。

これほどに学力水準、というより学習意欲が著しく低下した現在ではあるけれども、しかし高レベルの語学などはけっして教えようとせず、最初から旅行会話程度のごく低い目標を設定し、しかも授業を、いわば勉強の場から遊びの場へと変質させてしまえばどうなるだろうか。これなら誰が見ても、いちおう語学らしい授業は成り立つ。勉強は受けつけぬ学生でも、遊びなら多少は参加できるからである。むしろ外見こそ遊びらしく見えようと、これは実際には勉強なのだ、真剣な学習なのだ（事実はまさにその正反対でも）学生には絶えず主張し続けなければならない。すると学生もそれを信じるか、信じるふりをして、安んじて「勉強」という名の遊びに参加することが可能になるわけだ。

このような授業がもし成功したとすれば、それは教師と学生の馴れ合いによるものであり、かくて授業は（ことさら露悪的に言えば）「勉強ごっこ」となるだろう。そして確かに、これは正統的な語学教育とは程遠いものであろう。けれどもこれがわれわれの授業の実態であり、先に「教育」を演じている」と私が述べたのは、こ

---

(4) 四半世紀も前の話だが、本学の2年クラスではモーパッサン、ゾラその他の小説を教科書版原文で読ませる教師は珍しくなかった。極端な場合にはジード（仏文科の最上級学年で扱ってもおかしくない上級レベル）を採用した教師さえいた。私自身も『星の王子さま』など、現在では手が出そうもないものを採用したことがある。まして語学としては平易でも、内容的にはややハイレベルな教科書（フランスの歴史や文化を扱ったもの）といったものなら、15年ほど前までは誰もがごく当たり前のようによく使用していたものだった。

問題は当時の学生がどの程度、そうした中・上級の授業に随っていったかということだが、少なくとも当時の一般・専門科目の授業程度にはついていったはずだ、というのが私の実感である。周知のごとくフランス語は動詞の活用が複雑で、初歩のうちには文法にも読解にも苦勞しなければならぬ。それでもクラスの半数以上は授業に追随することができたように思われる。もっともこれはごく主観的な判断にすぎないから、教師によってはこれを否定する者がいても不思議ではない。

のような教育をも指しているのである。

### 3. 「ごっこ授業」と「多数派黙殺授業」

以上に述べたのは語学（それも本学のフランス語）だけのことであるが、演習・実習を主体とする少人数クラスなら、専門・一般教育科目でもこれと似た「ごっこ教育」は十分可能である。いや、おそらく現に同種の授業が多数実施されていることであろう。だが大人数を擁する授業では、たとえ真似したくともこの真似はできない。先にも述べたように、これは教師がひとつの授業全体を完全にコントロールできる状態でのみ実現しうる授業だからである。それゆえ大部分の科目では、いまだに余儀なく従来型の教育法をそのまま踏襲していることであろう。相も変わらず、それぞれの教科に応じた初歩的な概念と術語を教え、いくつかの理論を教え、そのために必要な勉強を要求したり参考書を読めと指示したりしながら。

するとまた、こうした授業の対象は当然、ごく少数の意欲的な学生だけということにならざるをえないだろう。言い換えればそれ以外の大多数の学生は無視し、黙殺することが必要になろう。大部分の学生は講義などにはいっさい関心を持たず、関心をもつふりさえしようとしな。彼らは授業を単位取得のための忍苦の場とこころえ、耳に固く栓をして、授業の終わりをひたすら待ち侘びている。さもないければ教室のうしろでとぐろを巻きながら、絶えず私語を交わし、またはメールや漫画に熱中し、注意されればその場だけ講義を聞くふりをしてみせる。こうした学生を相手にいま述べた正統的な授業を行なおうとすれば、そのために唯一可能な方法は、あたかもそんな不真面目な学生など眼中になく、教室のどこにも存在していないかのごとく振舞うことだけである。そうでなければ授業は成り立たない。

おそらく、これが専門科目・一般教育科目における授業の平均的な実態であろう。少人数の演習クラスで「ごっこ授業」を可能とする条件と、大人数授業でそれが不可能である条件は、まさに表裏の関係にある。これらは本物の授業が不可能になった状況下でやむを得ず捻出された一種の擬似授業なのだが、どちらも本来の教育からは遠く逸脱するものであることに変わりはない。

私はこうした現状を、簡単に「教育の荒廃」などと言って片づけたくはない。

「荒廃」だとしても、ではどうすればいいのか。むかしのような「本物の授業」に戻せというのか。往年の教育法、ここでいう「本物の授業」とは、自発的な予習・復習、暗記・暗誦、辞書・参考書調べを必要不可欠とする授業のことである。授業時間外のこうした絶えざる努力を避けては、とても授業には追従できない。その上で授業ではさらに熱心な聴講や疑義の質問が必要不可欠であり、それができなければ頭から排除されるのだ。

江戸時代から昭和前期までは、たとえ頑是ない子供であっても、四書五経の素読といった厳しい修練が課されていた。すなわち「本物の授業」の祖形だが、これはいわゆる自主性尊重、自発的勉強の対極にある教育法であり、徹底した暗記強制教育だった。

しかし現代において、そんな授業法が可能だろうか。ここで問題としているのは向学心の強い、一部小数の学生ではないことに注意していただきたいが、いまではそんな授業に耐えられる学生はほとんどいないだろう。教育法としてそれがどれだけ正しいにもせよ、「本物の授業」は、もはや過去のものとなったのである。

その点はともかく、「ごっこ授業」<sup>(5)</sup>に対立する概念が「本物の授業」であるなら、その「ごっこ授業」と並行する上記のような授業——大多数の学生を無視・黙殺することでようやく成立する授業——は何と称すべきか。適当な表現を思いつかないので、仮に「多数派黙殺授業」と呼ぶことにしよう。すでに述べたように、この二つは表裏の関係にあり、その違いは一方の「ごっこ授業」がどんなクラスにも

---

(5) 念のため付言すれば、いわゆる楽勝科目（ろくに勉強しなくともラクに単位が取れる科目）と「ごっこ授業」はけっして同じものではない。なぜなら私の言う「ごっこ授業」は、むしろ見かけ上は多少の努力や勉強（たとえばインターネットで検索させる）を要求するものだからである。些細な努力や勉強の結果、それなりの達成感や勉強したという満足感を味わうことができ、そのじつは学生にとって全然なんの苦労もなく骨も折れない馴れ合いの授業、それが「ごっこ授業」なのである。その本質は「遊び」に相違ないが、むしろ「遊び」だからこそ充実感を味わうために、多少の努力や勉強が必要だとも言えるのだ。

これに反して「楽勝科目」は、最初から意欲的な学生にだけ教えようとしているのだから、むしろ「多数派黙殺授業」の一形態——窮余苦肉の形態ではないかと考えられる。この種の授業をすべて、あらかじめ学生の理解力を見放し、授業努力を怠っている無責任授業（中にはじっさい手抜き授業もあるだろうが）と見なしたのでは、多人数教室で教えざるを得ない教師には立つ瀬がない。

いる少数者（本格的な勉強を望む意欲的な学生）を犠牲にし、他方が（「ごっこ授業」にしか随いていけぬ）多数者を犠牲にしていることだけである。ともに一種の擬似的授業には違いないが、意欲なき学生側からみれば、これこそが彼らにとって受容可能な唯一の大学教育であり、他方、「知識人予備軍」たる昔ながらの少数派学生にとっては（たとえ「ごっこ授業」については多少の不満があるにせよ）「多数派黙殺授業」はむしろきわめて望ましいものなのだ。彼らが少数であればあるほど、教師たちはいっそう熱意をこめて指導してくれるのだから<sup>(6)</sup>。

こうして、いまや大学のありかたは、よしんば擬似教育と謗られようとも、私のいう「ごっこ授業」と「多数派黙殺授業」が主流派となった。いや大学ばかりかわが国では、皮肉にもいまやその「ごっこ授業」が全盛である。目下さかんに喧伝鼓吹されている幼時からの英語教育や、文部科学省が積極的に推進しようとしている小学校からの英語教育なども、その典型というべきであろう。こうした早期教育の目的は高レベルの語学力養成を目指すものではなく、たんに子供のうちから英語に馴染ませ、以後の英語恐怖症を少しでも減殺しようとするだけのものなのだ。要するに外国人たちと、ごく簡単なおしゃべりができるようになりさえすればいいのである。そのためには「本物の授業」は有益どころか却って有害だから、極力ほんものの遊戯に近い授業、すなわち私のいう「ごっこ授業」こそが求められるはずなの

---

(6) こうした状況は何も今に始まったことではなく、大学がエリート階層のものであった昔から、ごく普通に見られた現象だったのではないかと指摘されるかもしれない。どんな有名大学でも、むしろ「多数派黙殺授業」こそが昔から主流派だったのではないかと。なるほど期末風景だけ見ればそう見えるかもしれない。大部分の学生が熱心に勉強するのは、むかしも今も期末試験の一時期だけだからである。

しかしむかしは、教師と学生のあいだに暗黙の信頼関係が働いていた。日ごろ怠惰な学生が試験時にのぞんでもなお必要な努力を惜しむならば、そのときこそ容赦なく落第させてやるぞと手ぐすね引いて待ち構えている教師、そうはさせじと一夜漬けて猛勉強する学生。そこには、いかに平素は不勉強でもやる気にさえなれば忽ち実力を発揮する学生への信頼と、その温情に甘えて存分に怠けてはいても、とき至れば必ずや自分の真価を見出してくれるはずだ、という教師への信頼。確かに、それは学生がエリートであった時代の（そしてまだその種の幻想が生き残っていた時代の）、一種、鼻持ちならぬエリート主義の産物であったかもしれない。だがいづれにせよ、それは現在の「多数派黙殺授業」とは似て非なるものであり、じつは形を変えた「本物の授業」だったと言えるのである。



だ<sup>(7)</sup>。

かつて吹き荒れた大学紛争は、思えばこうした事態（すなわち「教育の荒廃」）の出現を予想し、それを憂えて起きたのではなかったろうか。その結果がこうして平和な大学を出現させたのだとすれば、まことに皮肉な現象というほかはない。今日のわれわれの姿は、かつて理想の教育を夢見た学生たちの陰画でもあり、パロディだとも言える。なんとも滑稽、かつは物悲しい光景。

ともかくも、これがわれわれの偽らざる状況なのである。われわれはこの現実に関心を背けることなく、そこから出発する以外ない。

#### 4. 「ごっこ」教育から、より高次の教育へ

以上の事実から導き出される結論は、それがいかに悲惨でも滑稽でも、われわれはけっして「ごっこ授業」を否定しえないということであろう。できればわれわれも「本物の授業」がしたい。だがそれが不可能である以上、むしろ「ごっこ授業」をこそ積極的に推進すべきなのだ。

勉強がいやならば無理な勉強はさせずともよい。動詞の活用が覚えたくなければ覚えさせなくてもよい。教師によってそれぞれの授業に個性はあっても、要は会話ごっこであれゲームであれ、楽しい授業であればよい。しかし一つだけ条件がある。勉強した気分、多少とも外国語が使えるようになったという実感、それだけは是非とも与えたいという条件。もとよりそんな気分・実感は錯覚に違いないが、それで十分。もしそれを与えることができれば、少なくとも「多数派黙殺（見殺し）授業」などよりは「ごっこ授業」のほうがいくらか増しであろう。なんと言ってもクラス全員が授業に参加しているのだから。無論そんなことは少人数教育という語学の特殊性からきたものであり、われわれとしてはなんの自慢にもならぬ、ただの僥倖であるにせよ。

---

(7) これとは逆に、真のバイリンガル養成を目的として、本格的な早期英語教育を唱える人間も勿論いる（朝日新聞社、週刊『あえら』、「日本人なのにバイリン家族」04年2月23日号）。だが私は小論本文からも明らかであるように、こういう動きにはきわめて批判的である。しかし早期英語教育の危険性や弊害についてはすでに多くの論者が指摘しているから、ここでは単に市川力の好著『英語を子供に教えるな』（中公新書ラクレ、04年2月刊）の名を挙げるにとどめておく。

私の同僚たちは誰も「ごっこ授業」などという露悪的な？表現こそ使わないが、事実みな、それと同じことをやっている。それは私ではなく本学フランス語の方針なのであり、この点で非常勤講師も含めて、われわれはすべて同じ穴のムジナなのである。

ここで私は再度、例の語学教材「スピードラーニング」の例を持ち出したい。

具体的には、この教材の方法は、英語とその訳語である日本語の短文を「ただ聞き流す」ことであるらしい<sup>(8)</sup>。確かにこれならなんの予習も必要ではないから、一見容易らしく見えるだろう。もしそれが音楽とか効果音とかによる楽しい雰囲気の中で行なわれているのだとしたら、その外見はさらにいっそう強まるだろう。かくて、最も理想的にことが運ばば、結果として学習者は「5分だけ」のリスニングを、容易に「通勤時間の20分×2」に延長し、それをさらに1時間、2時間と無意識的に拡張していくかもしれない。こうして自分では“なんの努力もせず”，いつのまにか一日のかなりの時間をリスニングに当てるようになっていた、というような事態が起きたとしたら？ 学習者は当然その勉強量に応じた成果を挙げるに至るだろう。じつは100年の歴史を誇る語学教材「リングフォン」でも、おそらく現在もっともよく売れていると思われる英語教材「イングリッシュ・アドベンチャー」<sup>(9)</sup>でも、要するにその方法はこれとまったく同じことだからである。「努力不要」を謳った「スピードラーニング」は、かくて伝統的・正統的な学習法に回帰する。この教材の制作者が、初めからこのような学習効果を狙っていたことは疑問の余地がない。

けれども「聞き流すだけ」という広告を見ただけの潜在的学習者は、当然そうは思わない。英語使いになりたいと思いつつ、どうしても英語の授業についていけ

---

(8) ただ、インターネットの同教材広告は何種類もあって、その中には英語の短文→日本語の訳文という配列ではなく、逆に日本語の訳文が最初に出、次にその英語原文という教材もあるようだ。この両者は似ているようで、じつは本質的な違いがあると思われるのだが、どういう説明がなされているのだろうか。

(9) 新聞雑誌の広告に頻々と顔を出す「イングリッシュ・アドベンチャー」シリーズ（初級「家出のドリッピー」、初中級「コインの冒険」、中級「追跡」、上級「ゲームの達人」）は、その広告頻度だけからでも売れ行きのほどを推察するに十分だが、その内容がきわめて正統的な学習法であることは、宣伝文からも容易に読み取ることができる。この教材はその点でも高い評価を受けるに十分であろう。

なかった者、または何度も一念発起、再三再四英語の勉強を始めてはまた挫折してしまう者——こうした潜在的学習者にとって、かのショッキングな殺し文句「英語は死ぬほどきらいだった。だから英語が得意になった」は、さながら神の福音にも等しかったのではあるまいか。(蛇足だが、このユニークな殺し文句が自粛された？のはまことに残念なことだ。誇大広告だろうか。むしろユーモラスな広告、しゃれた広告というべきではないか。こんな言葉に目くじらを立てるような手合いは、いったいどういうセンスを持ち合わせているのだろう)。

この広告は「死ぬほど英語がきらいな」潜在的英語学習者を、ともかくまず英語に触れてみようと思わせる。それこそがこの殺し文句の偉大な功績なのである。

私のいう「ごっこ教育」が、この「スピードラニング」の方法に限りなく近似していることは、もはや敢えて白状に及ぶまでもないことであろう。もっとも、私の同僚たちの名誉のために付け加えておけば、われわれの「ごっこ教育」は「スピードラニング」をヒントにして生まれたわけではない。ネーミングは別だが、すでに述べたように、これは現代のわが国全体を風靡する現象なのである。

フランス語を選択したわれわれの学生の立場は、英語に憧れながら同時に恐れている学習者を前にした「スピードラニング」学習者の立場によく似ている。なぜなら現在フランス語を選択する学生の動機の大半は、残念なことにフランス語やフランス文化に対する憧れから来るのではなく、ただ英語だけはやりたくないという消極的な動機に基づくものだからである。それとともに、ABCからスタートするフランス語やドイツ語なら、遠回りのかたちで再度英語に近づくことができるという希望（これはわれわれ自身の積極的なPRのせいでもある）もいくらかは動機の一つになってはいる。英語のトラウマがさらに強い学生の場合は、ローマ字自体を忌避して安易に中国語を選択する<sup>(10)</sup>。これなら日本語と同じ字母を使うから余

---

(10) 驚くべきことだが、アルファベットを満足にそらんじることのできぬ学生が年々増えている。いまでは1クラスに必ず2人や3人はいるのではなからうか。こうした学生は当然まず中国語を選択するが、クラス定員の関係から希望が叶えられず、余儀なくフランス語やドイツ語に回されてくるのである。なお改めて断るまでもなく、中国語を選択する学生がすべて英語嫌いだとか不得手だとかと言っているわけではない。彼らの大半は当然、わが国と中国の未来を思い、自分の将来を考えて中国語を選択したはずである。念のため。

計に安心というわけだ。ことに本学のように英語力不足のため余儀なく選ばれた大学の場合、こういう傾向が顕著であろう。英語への憧れ、英語からの挫折感はそれほど強いのである。

われわれの「ごっこ教育」も、まずはフランス語ではなく、フランス語の「授業」そのものに対する興味を喚起するところから出発する。「スピードラーニング」が、努力は不要、勉強はするなど言いながら、じつは勉強の楽しさを身につけさせようと狙っている（推測）ように、われわれの方法も“フランス語は楽しい、これではまるで遊びじゃないか”と思わせながら、その遊びが徐々に本気となり、ついには本格的な勉強を目指す学生が出現してくることを期待している。そして事実「スピードラーニング」と同様（これも推測）、こうしてフランス語好きになった学生の中から毎年何人か、より意欲的な勉強を始める者が出てくるのだ。「上級フランス語」はこうした学生のためのクラスであるが、その受講資格（3・4年次配当）が生じる前に、早くも1年次から積極的な学習意欲を見せ始める者もいる。今年度（平成03年度）初めにも2年次の春の「仏検」で3級に合格した学生がいた<sup>(11)</sup>が、彼も1年生のときから進んで「上級フランス語」に割り込んできた学生だった。まだ試行錯誤の域を脱してないだけに、「ごっこ教育」の成功例は全体からみれば微々たる数にすぎないが、これなどはその理想例と言ってよからう。

## 5. むすび——「ごっこ授業」の理念をいかにフランス語教材に取りこむか

そこで冒頭に立ち戻って、私自身の共同研究本来の目的である語学教材制作が、この問題とどう関わってくるか、本稿の最後に検討してみよう。初めに断っておいたように、現実には私の担当する教材制作はまだ進行中である。その完成にはなお相当の

---

(11) 英語の場合、英検3級は中学卒業時に要求されるレベルであり、2級が高校卒業、1級が大学卒業時ということになっている。だが大学で初めて学ぶ独・仏語などでは、1年次に4級、2年次に3級合格が想定されている。けれども実際にそのレベルに達する者は英検と同様、それほど多くはない。ことに本学の場合、1年次の春学期には実質的な語学授業は行なわず、それこそ純然たる「ごっこ授業」に終始しているから、2年次春に3級合格と言え、優に他大学の1年次秋の仏検3級合格に相当するものと言えよう。これに比べ、非常勤講師として授業の傍ら私が仏検指導をも行なっている早大政経学部では、1年次秋に3級に合格する者もたくさんいる反面、2年次秋でも3級を取得できない者がいることを報告しておこう。

時間を要すると考えられるのだが、その点はともかく如上の所論から導き出されることは、当然いかにしてそれを具体的な教材制作に反映するかという問題であろう。

「ごっこ授業」の本質が勉強に名を借りた（あるいは騙った）「遊び」であることは再三述べた。一方、私の担当するNOKドリルとは教材自動生成ソフトOPUSを用いてのコンピュータ教材であるから、するとただちに次の疑問が問われることになる。いったい、その「NOKドリル」とやはら一種のコンピュータ・ゲームなのか。学習者がミサイルを打ち落としたり誘拐された王女を救出すべく活躍したりするうちに、フランス語の語彙や文法をいつしか身につけさせようとでもいうのかと。

勿論、そんなことができれば何も言うことはない。波乱万丈、スリル満点のゲームソフトの中に、適切巧妙にフランス語と日本語が配置され、たとえばフランス語の質問が理解できなければ正しい方向には進めないとか、フランス語の呪文（つまり何らかの定型表現）を唱えなければ秘密の扉が開かないといった調子で、ゲーム終了までに1000語にも及ぶ単語や、少なくとも数十以上の定型表現がインプットされているとしよう。

こうなれば、それはまさしく私のいう「ごっこ授業」の理想に合致するものだ。もしこの教材ソフトが有名な「ドラゴン・クエスト」なみの面白さ（伝聞）を有していれば、学習者は毎日何度でも夢中になってゲームに挑戦するだろう、すると、いやでも知らずしらずのうちにフランス語のリスニングや発話パターンを勉強することになり、遠からず相当レベルのコミュニケーション能力を獲得することになるだろう。本学で2年かけてようやく達成する程度の初歩の会話なら、1-2週間もせぬうちに完璧にマスターしてしまうかもしれない。まさに夢の教材というべきである<sup>(12)</sup>。

(12) 本音を言えば、じつはゲームソフトも万能ではないと私は思っている。その理由は、すべての若者がゲームソフトに関心を持つわけではないところにある。ゲームを好まぬというのではないにしても、さほど興味を示さぬ若者は相当数いるように思われる。彼らが嫌うのはゲームそのものというより、そのもつ幼児性やある種の扇情性のためであろう。

その上、ある種の「まじめな」学生は、純粋な遊びとしてなら喜んでゲームソフトを受け入れるとしても、それ自体が勉強だということになれば身を引くのではあるまいか。彼らにとって勉強は一種神聖なものであり、それゆえ遊びと勉強が入り混じるのを好まないからだ。確かにそんな学生は多くはないだろうが、興味深いのは、この種の学生がいわゆる一流大学のみならず、どのランクの大学にも必ず平均して見出されることである。これは学力や知能の問題ではなく、気質の問題だからである。

ところがこの種のゲームソフトの開発には、大手のソフト会社が総力をあげても何ヶ月・何年かの膨大な時間と、何億円もの開発費を要するということである。これではたとえコンピュータ技術やゲームソフトに詳しいわれわれの同僚が何人集まったところで、所詮素人の集団では、到底そんな面白い教材はつくれはしないだろう。まして、一語学教師の手の及ぶところではない。

しかしパソコン・ゲームのような面白さは無理でも、それを教授法の工夫と伝家の宝刀（成績評価）に置き換えるなら、また学習規模を五分之一、十分の一に縮小するなら、ささやかなその雛形ぐらいはわれわれにも可能なのではあるまいか。

3年前の小論「ある語学教材制作の試み」<sup>(13)</sup>では、私はまだこの方法の有効性を十分認識してはいなかった。そこでは十年以上前から試行錯誤を重ねつつ実験してきた二つの教育理念——大量の語彙・表現を短期集中的に反復する勉強の有効性と、これに必然的に伴う「うろ覚え」教育の主張——が論じられているのだが、その実践活動はといえば、学生から見れば難行苦行、教師から見れば重労働の連続にほかならなかった。この問題を何とか解決したいというのが新たな教材の模索となり、それがじつは今回の科研費による共同研究にもつながったのである。

とはいえパソコン・ゲームについては何ひとつ知らず、コンピュータ操作さえおぼつかない私に可能なのは、相も変わらず前記小論で開陳した教材の改良・改善でしかない。目下私は営々とその作業に従事しているが、具体的な方法と現在までの成果については次稿で述べることにしよう。

---

(13) 「千葉商大紀要」第38巻第2・第3合併号，2000年12月刊。